

ちうちの御えた、めはてぬれば、御直衣を奉る、打衣はかま二つ、衣ひとはなり、所司まゐりぬるよし奏するに  
 付て、御薬につかうまつるべき命婦藏人ども、かみあげそうぞくして座につく、晝の御座の御簾  
 南のはし北の額の間をたれたり、此間に承香殿の人、昔は中三間或は二間、御簾もとのまゝにあ  
 げたり、おのゝ几帳をたてわたす、ちか頃里内裏などにて、あたりの間一間、中はむにあぐる事  
 あり、ひがごとなり、今の代には本儀に任せて、つねの時のごとく鉤丸をあぐ、御座のまへに、さい  
 南陪膳の典侍の圓座これをしく、次の南圓座一枚くすりのかみの座とす、石灰の壇北のはし西  
 東のつまに、兩めんのだ、みをしきて命婦藏人の座とす、南第二の間の弘廂に圓座一枚をしき  
 て後取の座とす、典侍已下女房皆座につく、女藏人二人、上鬼の間より御臺をもちてまゐる、一御臺  
 にほしたいあり、これも近頃はなきよ、これよりさきに晝の御座に著かせ給ふ、生氣の方の御衣  
 に女官申、日記にまかせて是をすう、用意してさぶらふ、日の御座にてもめす、陪膳の典侍薬  
 を尋常の御直衣のうへにかさねて奉る、朝餉にてこれをめす、勾當の内侍これを陪膳の典侍薬  
 のかみ當色を著す、生氣の事なり其外は著せず、はいせんの典侍の髪は内侍これをあぐ、平額なり  
 此時まづ御厨子所の御はがためを供す、略御はがためまゐりて、此薬子鬼の間よりす、みて  
 端の几帳のもとにさぶらふ、女官青瑣門のほとりにて、典薬をめてみくすりをもよほす、小庭  
 にて典薬のかみ侍醫、宮のうちのつかさ、おのゝまづこれをなむ、一こんす、みて先薬子にの  
 ましむ、次に銀器に入れて几帳のはころびより、御座の間奉る、くすりのかみ是を取て、銀器のふたを  
 ひらきて典侍につたふ、是をめして返し給ふ、女主上座を立せ給ひて、夜の御殿の南の戸より入  
 給て、御ぬりごめ東の方の戸に向ひて立せ給へば、陪膳御盃を持てまゐらす、是も屠蘇はひがし  
 の戸に向て飲よし本文あるゆゑか、次に女官に返したまへば、是を後取の人にのましむ、一日は  
 日は五位、三日は六位、藏人なり、晦の日、奉行の藏人、これを切紙に書て、殿上の角の柱にむかしは  
 おすなり、近衛府辨官常にはあらねど、例あるなり、さて二獻には神明白散をくうす、むかしは  
 さかなを後取の人にたまふ事あり、大根をたぶ、女藏人給へり、三獻に度、嶂散を供す、如此御薬の人